

治部房御返事

弘安四年八月二二日 六〇歳

白米一斗、茗荷の子、はじかみ一づと送り給ひ候ひ畢んぬ。

仏には春の花、秋の紅葉、夏の清水、冬の雪を連れて候人々皆仏に成らせ給ふ。況んや上一人は寿命を持たせ給ひ、下万民は珠よりも重くし候稲米を法華經にまいらせ給ふ人、争でか仏に成らざるべき。其の上世間に人の大事とする事は主君と父母との仰せなり。父母の仰せを背けば不孝の罪に墮ちて天に捨てられ、国主の仰せを用ひざれば違勅の者と成りて命をめさる。されば我等は過去遠々劫より菩提をねがひしに、或は国をすて、或は妻子をすて、或は身をすてなどして、後生菩提をねがひし程に、すでに仏になること近づきし時は、一乗妙法蓮華經と申す御經に値ひまいらせ候ひし時に、第六天の魔王と申す三界の主を御座はします。すでに此のもの仏にならんとするに二つの失あり。一には此のもの三界を出づるならば、我が所従の義をはなれなん。二つには此のもの仏にならば、此のものが父母兄弟等も又娑婆世界を引き越しなん。いかゞせんとて身を種々に分けて、或は父母につき、或は国主につき、或は貴き僧となり、或は悪を勧め、或はおどし、或はすかし、或は高僧、或は大僧、或は智者、或は持齋等に成りて、或は華嚴、或は阿含、或は念仏、或は真言等を以て、法華經にすゝめかへて仏になさじとたばかり候なり。法華經第五の巻には、末法に入りては大鬼神、第一には国王・大臣・万民の身に入りて、法華經の行者を或は罵り或は打ち、それに叶はずんば無量無辺の僧と現じて一切經を引いてすかすべし。それに叶はずんば二百五十戒三千の威儀を備へたる大僧と成りて、国主をすかし国母をたばらかして、或はながし、或はころしなどすべしと説かれて候。

又七の巻の不輕品、又四の巻の法師品、或は又二の巻の譬喩品、或は涅槃經四十卷、或は守護經等に委細に見へて候が、当時の世間に少しもたがひ候はぬ上、駿河の国賀島の莊は、殊に目の前に身にあたらせ給ひて覚へさせ給ひ候らん。他事には似候はず。父母国主等の法華經を御制止候を用ひ候はねば、還って父母の孝養となり、国主の祈りとなり候ぞ。其の上日本国はいみじき国にて候。神を敬ひ仏を崇むる国なり。而れども日蓮が法華經を弘通し候を、上一人より下万民に至るまで御あだみ候故に、一切の神を敬ひ、一切の仏を御供養候へども其の功德還って大悪となり、やいと還って悪瘡となるが如く、薬の還って毒となるが如し。一切の仏神等に祈り給ふ御祈りは、還って科と成りて此の国既に他国の財と成りて候。又大なる人々皆平家の亡びしが様に、百千万億すぎでの御歎きたるべきよし、兼ねてより人々に申し聞かせ候ひ畢んぬ。

又法華經をあだむ人の科にあたる分齊をもて、還って功德となる分齊をも知らせ給ふべし。例せば、父母を殺す人は何なる大善根をなせども、天是を受け給ふ事なし。又法華經のかたきとなる人をば、父母なれども殺しぬれば、大罪還って大善根となり候。設ひ十方三世の諸仏の怨敵なれども、法華經の一句を信じぬれば諸仏捨て給ふ事なし。是を以て推せさせ給へ。御使ひいそぎ候へば委しくは申さず候。又々申すべく候。恐々謹言。

八月廿二日

日 蓮 花 押

治部房御返事